

言語の死後の生へ
 ——ベンヤミンの「翻訳者の課題」とその継承——

Toward the Afterlife of Language
 —On Walter Benjamin's Theory of Translation in "The Task of the
 Translator" and its Inheritance—

柿木 伸之*

もちろん、いくつもの言語を話せる人はいる。一つ以上の言語で運用能力を示す主体が存在する。そのなかのある人々は、同時に複数の言語で書くことさえできる（そこにあるのは補綴、移植、翻訳、転移の数々だ）。だが、このような人たちも、絶対的な特有言語へ向けて言葉を発しているのではないだろうか。未聞の言語の約束を抱きつつ、昨日は聞こえなかった唯一無二の詩を求めて。

ジャック・デリダ『他者の単一言語使用』¹⁾

■第1節 言語の故郷喪失から

言語には故郷の喪失が刻まれている。現在各地で話されている言語が、うたとともにあったそのいにしへの響きをもはやとどめていないというだけではない。言語そのものが生まれ故郷から放逐されている。ヴァルター・ベンヤミンにとって、聖書に語られるアダムとイヴのエデンの園からの追放が意味するのはこのことだった。遭遇した事物に応じるなかから、それを一つひとつ名づける言葉がおのずと生じていた場所。この樂園から人間の言語は

* 西南学院大学国際文化学部教授

切り離され、実質的には何も語らない記号へ分解してしまった。その道具としての使い方に通じることによって、人々は同類以外のものから鎖^{とぎ}されていく²⁾。第一次世界大戦のさなかにベンヤミンは、このことを象徴する名として「バベル」を捉えていた。

言語の故郷喪失とそれによる言葉の衰滅は、戦争に至る過程でベンヤミンの胸に迫ってきたのではないだろうか。1916年に書かれた彼の「言語一般および人間の言語について」は、年長の友人として彼の著述を支えたフーゴ・フォン・ホーフマンスタールが小説「チャンドス卿の手紙」に描いた言語そのものの危機を、言葉の失われた源泉から照らし出す試みという側面を具えていよう³⁾。ベンヤミンはこの言語論を書き下ろした後、生命を危険に晒すこととも結びついた言語の危機を見据えながら、言葉の衰滅のただなかに、真に何か語り出される出来事の余地を探った。それを切り開く営為として、彼は文学に着目する。1920年代の初頭には、その展開の媒体となるべき雑誌の発刊も準備されていた。

1921年の5月末にベンヤミンが手に入れたパウル・クレーの水彩作品の表題を採って「新しい天使」と名づけられたこの雑誌の構想において特徴的なのは、翻訳に、創作と批評に並ぶ地位が与えられていることである。その背景には、ベンヤミンが言語そのものを翻訳から、出来事として捉えていることがある。先に挙げた言語論において彼は、「事物の言語」が「人間の言語」へ翻訳されるなか、万象それぞれ独特の存在が語り出され——聖書の文脈においてそれは、被造物の存在の肯定であり、その証言であるが——、言語そのものも響き始めると論じている⁴⁾。言語はその始まりにおいては、他の被造物に呼応するなかで絶えず生成していた。しかし、その出来事の余地は、「バベル」以後は塞がれてしまった。

この閉塞した状況に介入し、言語の生成を賦活しうる営為の一つが、他言語による詩的な作品の翻訳である。そう考えるからこそベンヤミンは、自身の編集による雑誌『新しい天使』の三本の柱の一つに翻訳を挙げた。その予

告文のなかで他言語の作品の翻訳は、「生成しつつある言語そのものに不可欠の厳格な修練課程^{シュールガング}」と規定されている⁵⁾。では、そこにどのような「歩み^{ガング}」が含まれているのか。また、それはどのような意味で「厳格」なのだろうか。彼が手がけたシャルル・ボードレールの詩集『悪の華』のなかの「パリ風景」の一連の詩のドイツ語訳の序文として書かれた「翻訳者の課題」は、こうした問いに答えるべきものとして、文学雑誌の創刊号にも掲載されることになっていた。

第一次世界大戦後のインフレーションの煽りを受け、雑誌は結局発刊されることはなかったが、「翻訳者の課題」を冠した『パリ風景』は、1923年に仏独対訳のかたちで刊行された。この序文のなかでベンヤミンは、翻訳の作用として、作品の「死後の生^{フォルトレーベン}」を媒介する働きを挙げている⁶⁾。原作がその言語のまま受容されていた時期とは異なった生の展開を導くとは、同時に言語を補完することでもあるという。源泉から切り離され、枯渇した地上の言語の語る働きを翻訳が補ってこそ、原作は未聞の響きで立ち現われる。そのとき、原作と翻訳双方の言語のなかに生成の運動が萌している。ただし、この地点に至るためには、既存の言語に破壊的に作用するという意味でも「厳格」な歩みを経る必要がある。

そのような歩みにベンヤミンは、「字句通りであること^{ヴェルトリヒカイト}」を旨とする翻訳の姿を見ている。それによって言語間の相互補完的な関係が媒介され、原作とともに言語そのものが響き始める⁷⁾。こうして他言語で書かれた詩的作品の翻訳を、作品と言語そのものの死後の生へ向けて構想し、原作を「字句通り」に翻訳することを要請する「翻訳者の課題」について、ここではまず、文脈を前史からふり返り、そこで展開される議論の読解の地平を拡げることがを試みる。そのうえでベンヤミンの翻訳論を、言わばその後史を視野に入れながら掘り下げることにはしたい。それをつうじて、最終的には「翻訳者の課題」の地平を越えて、翻訳と詩作の越境的な往還から言語がその死後の生を繰り広げる可能性を探ってみたい。

■第2節 言葉遣いに寄り添う翻訳とその思想史的布置

ベンヤミンが「翻訳者の課題」を執筆した直接の契機は訳詩集の出版であるが、そこに至るまで彼は、ボードレールの詩を翻訳し続けながら、翻訳の概念を焦点に、言語についての思考を深めていた。このことを証言するものの一つが、1917年の2月にエルンスト・シェーンに宛てて書かれた手紙である。そこでベンヤミンは友人に、「ボードレールの翻訳」に取り組んでいる近況とともに、三か月ほど前に始めた「もっと大きな仕事」、すなわち前の年の11月に書かれた「言語一般および人間の言語について」の言語哲学を「続行したい」という希望を伝えている⁸⁾。そのように翻訳の理論と実践へ向かった背景にあるものとして、この頃深まっていたゲルシヨム・ショーレムとの交友も忘れることはできない。

1915年の夏に知り合ったばかりのベンヤミンの許を訪れたとき、机上にボードレールの『悪の華』があったと証言するショーレムは、1916年から翌年にかけて聖書の雅歌と哀歌をドイツ語へ翻訳している⁹⁾。とくに後者の翻訳には「嘆きと哀歌について」と題する跋文が添えられた。嘆きのうちに絶えず沈黙へ向かう「滅却の言語」を見届け、その歌による救済を語るショーレムの詩学には、ベンヤミンが言語論のなかで嘆きに論及していたことが影を落としている¹⁰⁾。他方で翻訳の実践をつうじて言語についての思考を深める姿は、彼を触発したにちがいない。彼は「翻訳者の課題」の執筆を予定していることをショーレムに伝える1921年3月の手紙のなかで、執筆にはこの友人との対話が欠かせないと述べている。

なぜなら、当時のベンヤミンにとって翻訳は「中心的な対象」であり、ショーレムはすでに「この対象について自身の思想を持っている」からである¹¹⁾。このことをベンヤミンは、ショーレムから送られていた雅歌と哀歌の翻訳などから知っていた。これらに応えるベンヤミンの言葉のなかで、「翻訳者の課題」の議論と関連して注目されるべきは、雅歌の翻訳への批判的な

言及と考えられる。ショーレムの翻訳ではヘブライ語への畏敬が勝っているために、翻訳の対象への愛と敬意がドイツへの翻訳のなかで十分に表現されていないと述べたうえで、ベンヤミンは、詩人フリードリヒ・ヘルダーリンによるピンダロスの頌歌のドイツ語への翻訳に触れる。

ここで、二つの言語が一つの^{スフェーレ}圏域に入り込むことは、原理的には不可能ではない。むしろこのことがあらゆる偉大な翻訳を構成しており、私たちの許には本当にわずかしかない偉大な翻訳作品の基礎をなしている。ピンダロスの精神においてヘルダーリンには、ドイツ語とギリシア語が同等である圏域が開かれた。これらの言語に対する彼の愛は一つになったのだ¹²⁾。

この圏域を指し示す点で、この詩人の翻訳作品は「偉大」なのである。

1917年の夏に示された、ヘルダーリンの訳業に翻訳の範を求める立場は、その三年あまり後に書かれた「翻訳者の課題」において、翻訳が「字句通りであること」を重視する方向で掘り下げられることになる。その際にベンヤミンが着目するのがソポクレスの悲劇の翻訳である。ドイツ語で理解される意味からは極限まで自由でありつつ、ギリシア語の原文に、その^{シンタクス}統辞に至るまで忠実なヘルダーリンの翻訳について、「翻訳者の課題」ではこう述べられている。

そこ〔ソポクレスの悲劇の翻訳〕では、言語どうしの^{ハーモニー}調和が非常に深いところに達しているため、意味は風琴が風に触れられるように、かろうじて言語に触れられるにすぎない。ヘルダーリンの翻訳こそ、その形式の原像である。それは、ピンダロスの第三ピュテーティア頌歌のヘルダーリンによる翻訳と〔ルードルフ・〕ボルヒャルトによる翻訳を比較すれば分かるように、テキストを完璧に置き移しているという点でも、

フォアビルト ウアビルト
模範に対する原像の位置にある¹³⁾。

ここでも翻訳が目指すべきは、「言語どうしの調和」とされている。原作の言葉遣いの一つひとつに寄り添って翻訳するとは、複数の言語が響き合う圏域を切り開くことなのだ。そのなかでこそ、地上の言語は補完されうるのである。

ベンヤミンが二つの言語が響き合うことへ向けて翻訳を考え、そのような翻訳の特徴を「字句通りであること」に見ていた点は、同時代における彼の翻訳論の位置を測るうえでも重要と考えられる。そのためにまず顧みられるべきは、「翻訳者の課題」が書かれ、ボードレールの詩の翻訳とともに公開された1920年代前半、翻訳の実践を背景にそれが「字句通りであること」を要請していたのが、ベンヤミンだけではなかったことである。彼に近いところではユダヤ人の思想家、フランツ・ローゼンツヴァイクが、みずから編んだ中世の詩人イエフダ・ハレヴィの詩のドイツ語訳の選集の跋文のなかで、ヘブライ語の詩をドイツ語へ「字句通りに翻訳すること」を企図したと述べている¹⁴⁾。

ここで「字句通り」の翻訳は、「翻案」との対照において主張されている。それは、他言語で書かれた、あるいは遠い昔にその「言語」で書かれた原作を、「同じ言語」を話して同時代を生きる人々に分かりやすく見えるよう作り替えてしまう。すると原作は、情報伝達的手段として機能している言語の枠内で、「何も言うべきものがない人が話すように」しか響かない¹⁵⁾。「翻案」は原作の言葉を、通りのよい言葉遣いで塞いでしまうのだ。それは詩的な作品にとって致命的である。もはや何も新たに語ることのない作品の形骸だけが流通することになる。このことがまかり通る当時の状況を見据えながら、ローゼンツヴァイクは、中世のヘブライ語の詩を翻訳するにあたり、「翻案」と正反対の翻訳の姿を主張している。

これが「字句通り」の翻訳であるわけだが、それは「異質な語り口を、そ

の異質さにおいて再現する」。そうしてこそ、何かを初めて語る詩の言葉が、別の言語のうちに響いてくる。こうして異質な言葉遣いが吹き込まれるとともに、翻訳する言語が更新される¹⁶⁾。何かを初めて語る言葉を発しうる言語へ生まれ変わるのだ。ローゼンツヴァイクは、意思疎通のための道具に硬直した状態から言語を解放し、言語にその可塑性を取り戻させることと、まさにそれによって原作の言葉を新たに響かせることに、「字句通り」の翻訳の意義を見届ける。この点において彼の翻訳論は、ベンヤミンのそれと響き合う。原作の言葉遣いに忠実な翻訳は、翻訳する言語に異質な響きを呼び込むことで、その生成を賦活するのである。

ここで、原文を字句通りに翻訳することをつうじて言語を創造的に補完する方向性を示した同時代の翻訳者として、ベンヤミンとローゼンツヴァイクに加え、中国の作家、魯迅を挙げておきたい。先の二人の訳業から少し時代は下るが、1930年代に魯迅は、ゲオルギー・プレハーノフの『芸術論』をはじめ当時のマルクス主義に関する論文を数多くドイツ語訳や日本語訳から翻訳していた。重訳のかたちであるとはいえ、魯迅は字句通りに中国語へ翻訳するよう努めたという。そのような「硬訳」に対しては当初から批判があり、なかにはこれを「死訳」と断じるものすらあった。これに応じて書かれた「『硬訳』と『文学の階級性』」は、言語の補完を目指す翻訳の姿に触れている点で注目されるべきと思われる。

この論考において魯迅は、雑誌『新月月刊』に掲載された彼の「硬訳」に対する批判に応じて次のように述べる。

今日ではまた「外国文」が入ってきた、いろいろな句法は、新しく作る——悪くいえば、無理に作る必要がある。私の経験からいって、こういう硬訳の方が、幾つにも句切って説明的に訳すより、原文の力強い語気はいっそう保てると思う、ただし中国文が新しく造られることに待つというのは、いままでの中国文には欠陥があるのだからである。「奇蹟」と

かがあれば、どうするというのか？ ただし「手さぐりで」、「我慢して読む」というのでは、一部の人たちにはむしろ「愉快なことではない」のである。しかし私はもともと「爽快」や「愉快」な気分を新月社の諸君に献呈しようとは考えていないので、ただ若干の読者に何か得るところがありさえすればと思っているのだ¹⁷⁾。

既存の「中国文」を軋ませることによって、翻訳される言葉の語気を伝えるとともに、その媒体となる「句法」をも作り出す「硬訳」。それは、欠けていた言葉遣いを補完することによって「文」、すなわち言語を創造する。むしろ、その過程をたどるとき、言語のなかに摩擦が生じる。しかし、異様な響きに引っかかるなかでこそ、思想を伝える言葉が、従来の言葉遣いを突き破って生まれてくるのに立ち会えることができる。その経験を出発点に、当時の民衆の解放へ向けた思考が、言葉を創ることへ向けて喚起されることを期待しながら、魯迅は理論的な著作の「硬訳」を積み重ねていた¹⁸⁾。

このように、ベンヤミンが「翻訳者の課題」において翻訳が「字句通りであること」を要請したのとほぼ同時に、ローゼンツヴァイクと魯迅もまた、翻訳は「字句通り」であるべきだと主張していた。それによって語と語の自然な結びつきは解体され、翻訳する言語は異様な響きを発し始める。それに至るまでのテキストへの忠実さによって翻訳は、他言語で書かれた言葉を、その強度もろとも伝える媒体と化す。この出来事を表わすのが、ベンヤミンの「原作の^{エコー}筋」という言葉だろう。それを翻訳のうちに響かせることに、彼は「翻訳者の課題」を見ていた¹⁹⁾。そしてこの反響を、言語がその欠如を補うかたちで創られる運動を証すものと見る点でも、三人の翻訳者の翻訳論は符合している。

とはいえ、ローゼンツヴァイクと魯迅は、「字句通り」の翻訳による「言語の更新」を、翻訳する側の言語に見ている。この二人は、翻訳される言葉の媒体となる言葉を創る翻訳の働きを、基本的には翻訳する言語の生成へ向

けて考えていた。それに対してベンヤミンは、「翻訳は究極的には、言語どうしの最も内的な関係の表現という目的に適うものである」と述べている²⁰⁾。翻訳において原作の「死後の生」は展開し、それとともに翻訳する言語は、生成の脈動を始める。このとき、原作の言語もまた生長を示している。

しかしながら、もし個々の言語がそのようにして、それぞれの歴史のメシア的終末に達するまで生長するとすれば、作品の永遠の死後の生と、言語の無限の活性化に触れて燃え立つ翻訳こそ、絶えず新たに言語の聖なる生長を検証する。言語のなかに隠されているものが啓示からはどれほど遠く離れているかを、またその隠されているものが、この隔たりを知るなかにどこまで現われて来ることができるかを確かめるのだ²¹⁾。

彼はさらに、「翻訳において原作は、言わば高次の純粋な^{ルフトクライス}気圏へ向けて生長する」とも述べているが、この「気圏」は、彼がショーレムに語った「ドイツ語とギリシア語が同等である圏域」と重なるにちがいない。

ベンヤミンは、翻訳が「字句通りであること」の意義を「言語の補完への大いなる憧憬」を響かせるところに見るが、この「補完」は相互的である²²⁾。翻訳が原作の「死後の生」の一段階を表わすとき、それは原作の言語が生成の途上にあることも証言しているのだ。この生長の萌しを示すのが、詩的な表現に凝縮される、何かを語ろうとする言語の^{インテンツィオ}「志向」であり、それは個々の言葉の表現の構成として表われるという。翻訳にまず求められるのは、このことへの忠実さにほかならない。それによって同時に、言語間の相互補完的な関係が始まるという洞察は、「字句通り」の翻訳を要請する同時代の翻訳論における「翻訳者の課題」の独自の位置と同時に、今あらためて顧みられるべきその潜在力も示していよう。

■第3節 愛による解放としての翻訳

言葉が強力な武器になりうるということが知られるようになった二十世紀の前半、言葉の力が発揮されるメディアを掌握した者は、この武器を言わば内へふり向け、言葉の礫を他者に投げつけることへ、さらには最新の兵器を生身の人間の殺戮に用いることへ人々を駆り立てていた。こうした煽動が横行するなかで人々のあいだは引き裂かれ、それとともに言葉は摩滅していった。魯迅は、支配的な権力に反抗する若者の思想の枯渇を危惧して「硬訳」を届けようとしたが、これも言語の危機への応答の一つと言えよう。彼を含め、世界大戦をはじめとする戦争に極まる危機を正視しながら、なおも何かを真に語りうる言葉を求めた人々の一部は、積極的に他者の言葉遣いを編み込みながら言語の織物を紡ぎ出そうとしていた。

それによって言語そのものが形づくられる運動を賦活しようとする姿勢が、他言語で書かれたテキストを「字句通り」に翻訳することの重視となって表われていたにちがいない。このときローゼンツヴァイクと魯迅の翻訳論は、翻訳する言語の生成へ注意を向けていた。そこには集団の新たな文化を、言語から形成しようとする意志も示されていた。これに対してベンヤミンの翻訳論は、翻訳が「字句通りであること」をつうじて、二つの言語の対等で相互補完的な関係の圏域が開かれることを重視している。その背景には、彼の翻訳論が言語の本質的な次元への洞察を踏まえ、言葉がおのずと何かを語り出すようになる「高次の純粋な気圏」へそれぞれの言語を近づけるところに翻訳の意義を見ていたことがある。

「バベル」以後の言語は、もはや単独ではその圏域に接近することはできない。翻訳をつうじて他の言語と相互補完的な関係を築くことによるのみ、言語はそこへの生成を表出できる。ベンヤミンが「言語の聖なる生長」と呼ぶこの生成を証言するのが詩的な表現であり、まさにその「字句通り」の翻訳が問題であることはひとまず措き、今は彼の翻訳論が、西洋における

翻訳の伝統がローマ時代から、あるいはそれ以前から言語と言語のあいだに築いてきた支配と被支配の関係を越えた言語間関係を指し示している点に注目したい²³⁾。そして、支配と被支配の関係の上に近代的な制度としての「言語」が成り立っているとすれば、彼が語る翻訳は、この「言語」を突き抜ける潜在力をも具えていることになろう。

ベンヤミンによれば、言葉の外にある「意味」を伝える手段として機能する次元を越えて、それ自体において何かが語り出される媒体であろうとする原作の言葉を翻訳のうちに解き放つのが「翻訳者の課題」である。この課題に応じるために、翻訳者は「自分自身の言語という朽ちた柵を打ち破る」という²⁴⁾。「言語」という制度を突き破ってこそ、言語間の相互補完的な関係の地平が開かれる。そこに至る方法として「字句通り」の翻訳が想定されているわけだが、これが一つひとつの言葉に愛を込めるものと論じられていることも、翻訳によって築かれる言語間関係を考えるうえで重要だろう。

つまり、一つの器のかけらを組み合わせるには、かけらどうしが最も微細な細部に至るまで相互に合致しなければならないが、同じ形をしている必要がないように、翻訳はみずから原作の意味に似せるのではなく、むしろ愛をこめて、個々の細部に至るまで、原作が示す意味する仕方を、みずからの言語のうちに形づくらなければならない。そうすることによって原作と翻訳は、ちょうどあのかけらが大きな器の破片と認められるように、一つの大きい言語の破片として認識されうようになる²⁵⁾。

翻訳を貫く愛。それを掘り下げるのに、ここではガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァクの思考を顧みておきたい。

脱植民地化へ向けた思考を牽引するスピヴァクの思想に着目するのは、一つには彼女が比較文学の研究の過程でベンヤミンの翻訳論に出会っている

からである。彼女は『ポストコロニアル理性批判』の文学論に、まさに先に挙げた「翻訳者の課題」の一節を引用し、そこに示される原作の言葉に対する「愛情のこもった」翻訳の姿勢を、ラディヤード・キプリングの作品に見られる、翻訳される言語を「劣った」周縁的なものとして暴露するような「侵犯」としての翻訳と対照させている²⁶⁾。ただし、ここでヘルダーリンの訳業を「原像」とするベンヤミンの翻訳論は、ギリシア語のドイツ語への翻訳を論じるものとして捉えられ、そこにある「愛情」は、模範としての「古典語」への崇敬として取り上げられている。

それゆえ、ここでベンヤミンの翻訳論は、ギリシア語とラテン語で書かれた古典古代のテキストを各言語へ翻訳し、文化を形成してきたルネサンス以来の伝統に組み入れられている。この翻訳の伝統が言語そのものを形成し、帝国主義の時代におけるその話者は、自身の文化的な地位を確認するために「侵犯」としての翻訳を実践するようになるわけだが、ベンヤミンが論じる詩的作品の翻訳はむしろ、そのような翻訳の歴史の継続を、「言語」という制度の解体によって中断しうるものと考えられる。それによって相異なった言語のあいだに共鳴の回路を開く行為が、愛にもとづいているのだ。スピヴァクもまた、脱植民地化へ向けた翻訳の実践を論じる別の文脈で、そのような翻訳が愛に貫かれていると語っている。

「翻訳とは最も親密な読む行為である」²⁷⁾。1993年に刊行された論文集『教育装置の内部の外』に収められている論文「翻訳の政治学」においてスピヴァクは、18世紀のベンガル語の詩を英語へ翻訳した際に訳者の序文に記したこの言葉をみずから引用し、愛の行為としての翻訳を、植民地主義と絶えず連動してきた、征服する翻訳と対照させている。そのために彼女は、自身が手がけたラム・プロシャド・センの詩の翻訳を、同じ詩が西洋人の「詩」への期待に応えるようにフランス語訳された例と比較する。後者では、詩に描かれる「母親」の生活と深く結びついた、かつ自嘲が交じったユーモラスな調子が削ぎ落とされてしまっている。それによって詩は、オリエンタリズ

ムに見合った姿へ崇高化される。

こうして知によって他者の言葉を均し、飼い馴らす翻訳に對置されるのが、他者の言葉に寄り添うなかで、翻訳する言語のほうを擦り切れ、その組成がほつれていくような翻訳である。先に触れた序文のなかでスピヴァクは、「翻訳するとき、私はテキストに降伏する」と語っている。愛にもとづく翻訳は、みずからの言語が解体するまでに、徹底的にテクスチュアに付き従うのだ。それによって翻訳者は、他者の言葉が修辞を含めて響く回路を言語のうちに探る。

読解や伝達のいかなる行為にも、わずかなりとこの危険なほつれをもたらす要素が含まれていて、それは何らかの意味でかき乱すものである。にもかかわらず、私たちの読解や伝達の作用の支えになるものは、このほつれさせる要素を最小限にとどめなければならない。愛の、あるいは愛における伝達と読解の場合を例外として。〔中略〕翻訳者の課題とは、原作とその影のあいだにこの愛が行き渡るよう促すことである。ここにあるのは、ほつれることを許容する一方で、翻訳者の作用と、その想像上の、あるいは現実の聞き手の要求を斥けるような一つの愛だ。非西洋の女性のテキストからの翻訳の政治は、あまりにもしばしばこうして愛が浸透する可能性を抑圧してしまうが、それは翻訳者が原作のレトリシティ修辞的特徴に関わりを持ってないか、あるいはそれに十分な注意を払うことができないからである²⁸⁾。

これが成し遂げられるとき、一つの制度としての言語がほつれ、新たな、その言葉と響き合うようなもう一つの言語が生まれている。それとともに、植民地主義的な支配と被支配の関係を越えて言語と言語が呼応し合うのである。

このことへのスピヴァクの洞察も、ベンヤミンの翻訳論に期せずして呼応

するものと言える。他者の言葉の一つひとつに、彼が器の破片を組み合わせることに喩えたとおり、その肌理に至るまで寄り添っていくなら、翻訳者も、翻訳される言葉の語り手も、近代の制度としての「言語」から解放され、新たな、他者に開かれた言語を生きることに開かれる。ベンヤミンによれば、そのことが翻訳作品において、言語と言語の共鳴し合う関係として表現されるのであり、その地点へ詩的な作品の翻訳は向かう。ここに響く言語間の「最も内的な関係」は、「翻訳とは最も親密な読む行為である」というスピヴァックの言葉に照らすならば、愛にもとづく「最も親密な関係」であるとも考えられる。

この密やかな関係は、国民や民族の「言語」と認められてきたものを攪乱しながら、植民地主義的とも結びついてきたその制度がこのまま続くことに抵抗する。新たに織られた翻訳のテキストにおいて言語と言語が共鳴し始めるというささやかな出来事は、「言語」を動揺させ、その歴史を中断するのだ。ベンヤミンが「翻訳者の課題」として語った、「自分自身の言語という朽ちた柵を打ち破る」行為を、「言語」の歴史の中断を射程に収めたものと考えれば、この課題を語るテキストが、つねに「どこか腐ったもの」がある法の制度が人々を「神話的暴力」の支配下に置き続ける歴史の中断の可能性を探究する「暴力批判論」とほぼ同時期に書かれたことの意義を掘り下げることができよう²⁹⁾。

「暴力批判論」と「翻訳者の課題」という同時期の二篇のテキストにおいてベンヤミンが目指したのは、「死後の生」としても展開する生を神話——「国家」とその法秩序という神話、そして「言語」という神話——から解放することであり、ここで取り上げた「翻訳の政治学」をはじめとするテキストにおいてスピヴァックが探究し続けているのは、脱植民地化というかたちで生を解放する可能性である。このようにともに解放を追究しているとはいえ、ベンヤミンの思考において解放が同時に救済である点は、二人の立場の差異を示す点の一つと言えよう³⁰⁾。そして、彼が救済へ向けて語るのが、独

特の神学的な概念にはかならない。その一つが、「翻訳者の課題」において論じられる「純粹言語」の概念である。

突き詰めるならば神の創造の言語と重なり、言語の歴史の「メシア的終末」に初めて復元されるという「純粹言語」。それは、特異な存在をそれ自体において語り出す「名」として響く³¹⁾。ベンヤミンは、「翻訳のうちに純粹言語の種子を成熟させること」を「翻訳者の課題」と規定しているが、原作においてその「種子」の所在を示すのが、翻訳者に噛み砕くことを許さない詩的な言葉遣いであるにちがいない³²⁾。そして、スピヴァクが原作の「修辞的特徴」と呼んだものと重なるこの原作の核心を翻訳のうちに取り出すには、他者の言葉に没入するような愛が欠かせないのだ。それによって「言語」が瓦解し、他者の言葉がその桎梏から解放されるとき、他ではありえない言葉が翻訳に反響し始める。

■第4節 言語の死後の生へ

スピヴァクは「翻訳の政治学」のなかで、自身がその主著の一つの英語への翻訳を手がけたジャック・デリダの言葉を借りて、原作の「修辞的特徴」を「散種」^{ディセミナシオン}の場と規定している³³⁾。そこでは「言語」という神話的な秩序を形成してきた記号と意味の自明で一義的な結びつきが揺さぶられ、記号の指示作用が分散する。そのように自動的な語の連なりを攪乱する要素を注意深く翻訳のうちに取り出すなら、他者の独特の言葉遣いが言語の未聞の響きのなかに浮かび上がるだろう。そこにスピヴァクは愛の表現を見たわけだが、デリダであれば「他者の単一言語使用」どうしの呼応を見て取るのかもしれない。彼によれば、その表われとしての独特の言葉遣いにしても翻訳をつうじて発明される。

自伝的な対話篇のかたちで書かれた『他者の単一言語使用』におけるデリダの言語論は、発語そのものを翻訳から捉え直すものである。彼によれば、

誰ひとり固有の言語を持つことはできない。人は他者の言語のなかで発語を始める。「母語」とは、「母」という他者の言語なのだ。ただし、他者の言語が同一のままに存在することはなく、「母語」として想定される「言語」にしても、歴史上の虚構にすぎない³⁴⁾。それゆえ言葉を発するとはつねに、固有のものではない言語のある用法を、別の言葉遣いへ翻訳することである。しかも、この翻訳の働きには、起源もなければ目的もない。そのような絶対的な翻訳のなかで、人は不断に「特有言語」を狂おしく追い求めるといふ。

このような『他者の単一言語使用』の言語論は、翻訳から言語という出来事を捉え返そうとする「言語一般および人間の言語について」以来のベンヤミンの言語論を、「言語」の近代史に翻弄されて固有の言語を持ちえない人々がいる状況を踏まえながらさらに発展させるものと言えよう。そしてデリダ自身、そのような人々の一人である。彼は、「バベル」の名にベンヤミンが集約した言語そのものの故郷喪失を、「母語」としての言語を喪失した自身の境遇——デリダは、フランスの植民地だったアルジェリアでフランス語を「母語」として育ったユダヤ人であるが、第二次世界大戦中の宗主国の反ユダヤ主義的政策によって、フランス語で学ぶ学校から追われた——から見つめ直しているのではないだろうか³⁵⁾。

デリダはこの「失語」のうちにこそ、「絶対的な翻訳」をつうじて新たに言葉を発する可能性がある³⁶⁾。その言葉は、言葉そのものが語り始めるほどに「絶対的」な「特有言語」ですらありうるが、それを志向するとは、言語をさらに他に、他者の言語に開くことでしかありえない。ここにある「他者の単一言語使用」は「つねに、他について語り、他へ語りかけることを可能にする、異他の論理による開かれを呼び寄せることに帰する」のである³⁷⁾。そして、言葉それ自体が響き始めることと、ある物事が語り出されることが一つになるところにこそ、詩が生まれる。その言葉においては、表現の内容と形式が——ベンヤミンに言わせれば、「果実とその外皮」のように——独特の統一をなしていよう³⁸⁾。

このように詩的であることにも開かれた「特有言語」をめぐるデリダの議論において注目されるべきは、その「絶対的」な姿を示す例として、ホロコーストの恐怖にじかに晒されながらそれを生き延びた後、パリの地からドイツ語による詩作を展開したユダヤ人の詩人パウル・ツェランの詩的言語を挙げている点である。その際デリダは、ツェランを「詩人にして翻訳者」と呼ぶ。広く知られているように、ツェランは多言語に通じ、英語、フランス語、ロシア語の詩を数多くドイツ語へ翻訳している。そして、ツェランの詩作に言わば伴走した比較文学研究者ペーター・ソンディ以来の解釈が示しているのは、そのような翻訳の実践がツェラン独特の詩的言語の形成に影響を及ぼしていることである³⁹⁾。

ウィリアム・シェイクスピアのソネットのツェランによる翻訳を検討したソンディの論考によると、その翻訳は、ベンヤミンの語る「字句通り」の翻訳を思わせる仕方でシェイクスピアの言葉の詩的な組成に注目し、それをドイツ語の訳文へ、独特の詩的な言葉を形成するかたちで取り出している⁴⁰⁾。そのような翻訳によって、それぞれの語の意味を表示する作用に代わって、語る働きが浮かび上がってくるという。ツェランの翻訳は、原作のうたを引き出しているのだ⁴¹⁾。そのためには、響きを含めた言葉の現われ方とそれが語り出す内実の緊密な結びつきに踏み込まざるをえないが、この批評的な作業は詩人でもある翻訳者にとって、詩作そのものへの批評的な反省も含んでいる。

このような翻訳を重ねながらツェランは、自身の詩の姿を再帰的に照らし出すかたちで同時代の思考に応える詩——その最たるものが、テオドア・W・アドルノの「アウシュヴィッツの後に詩を書くことは野蛮である」という言葉に^{ファーデンゾンネン}「糸の太陽」だろう——を書き継いでいった⁴²⁾。その過程にはもしかすると、翻訳と詩作を截然と分ける「翻訳者の課題」の議論に対する批判的な応答が含まれているのかもしれない⁴³⁾。言語と言語のあいだを、そして翻訳と詩作のあいだを行き来しつつ、「特有言語」を紡いでいく

ツェランの文学の姿は、ベンヤミンが考え抜くことのできなかった詩と翻訳、ないしは創作と批評を往還するなかから言語の死後の生が展開する可能性を示しているのではないだろうか。

たしかに詩的な作品の翻訳は、形式と内容が一体になった原作の言葉の組成へ分け入り、両者の関係を捉え返す批評であるにちがいない。それをつうじて紡がれる翻訳の言葉は、原作の言葉の内実を、「ゆったりとした襷をたたえた王のマントのように包み込む」に至るだろう⁴⁴⁾。とはいえ、「純粹言語」へ向かう原作の詩的要素が新たに——作品の「死後の生」において——響き始める余地を開こうとする翻訳の試みが、ツェランの「エングフェールング追奏」などが示すように、他者の言葉を幾重にも織り込みながら、語りえないとされる出来事を、死者のうちに秘められたその記憶をも、他ではありえない姿で想起する言葉に結晶するとき、詩作と翻訳、そして創作と批評のあいだに息をめぐらす回路が開かれていると考えられる。

言語の境界を絶えず越えながら、さらには「言語」を突き抜けながらこの回路を行き来する息遣い。そこから何かを新たに語り出す言葉が生まれようとしている。その言葉は制度としての「言語」からすれば、どこまでも不純かもしれない。しかし、そこには「純粹言語」としての「名」の力——それは「言語」の喧騒を中断する「アウストゥルックスローズ表現なき」力である——が潜んでいるはずだ。「翻訳者の課題」のなかでベンヤミンは、詩人は「言語の森」の内側に、翻訳者はその外側にいると論じる。だが、越境的な文学ではその内と外は絶えず入れ替わりうる。幼年時代の彼が丸められた靴下を広げ、また丸めて遊んだときのように⁴⁵⁾。このような反転の遊動から今、言語の死後の生が密やかに展開しつつあると考えられる。

註

- 1) Jacques Derrida, *Le monolinguisisme de l'autre — ou la prothèse d'origine*, Paris: Galilée, 1996, p. 126. 日本語訳は、ジャック・デリダ『たった一つの、私のものではない言葉

——他者の単一言語使用』守中高明訳、岩波書店、2001年、128頁。

- 2) このことをベンヤミンは、1916年に書かれた「言語一般および人間の言語について」のなかで、「言語精神の墮罪」という言葉に集約している。「墮罪とは、人間の言葉の誕生の刻である。そこで名は、もはや無傷のまま生き続けることはなかった。人間の言葉は、名の言語から、この認識する言語であることから、ということは——こう言ってよいだろうが——この言語に固有の内在的な魔術からも脱けてあからさまに、外から魔術的になった。言葉は、(自己自身の外にある)何かを伝達するとされる。まさにこれこそ、言語精神の墮罪である」。Walter Benjamin, »Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen«, in: *Gesammelte Schriften (GS)* Bd. II, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1977, S. 153. 日本語訳は、「言語一般について、また人間の言語について」、山口裕之編訳『ベンヤミン・アンソロジー』河出書房新社、2011年、28頁。この言語論が示す聖書の「創世記」の解釈によると、アダムによる被造物の命名が象徴するように、人間の言語は原初的には、それぞれの事物をその名で、つまりその本質を直接に語り出していた。しかし、楽園追放とバベルの塔の破壊以後、人間の言語には「墮罪」が刻印されている。言語が同じ共同体に属する人間どうしのコミュニケーションの手段と化したことは、その表われだという。それとともに言葉は、自己の外にある特定の意味ないしは情報を表わす記号へ分解した。それを道具として使いながら、人間は事物を支配しようとするようになる。それとともに人間は、「同じ言語」を話す者以外からは鎖されてしまう。
- 3) ホーフマンスタールの書簡体の小説「チャンドス卿の手紙」では、「まして言葉は僕を見棄てるのです」と主人公の境遇が表白されるが、そのさまは同時に言語の記号への解体も表わしている。Hugo von Hofmannsthal, »Brief des Lord Chandos«, in: *Gesammelte Werke* Bd. 7: *Erzählungen, erfundene Gespräche und Briefe*, Frankfurt am Main: Fischer, 1979, S. 467. この小説の日本語訳は、『チャンドス卿の手紙、アンドレアス』川村二郎訳、講談社、1997年、17頁。ホーフマンスタールは、自身が編集を手がける雑誌『新ドイツ論叢』に、ベンヤミンの「ゲーテの『親和力』」と受理されなかった教授資格論文『ドイツ悲劇の根源』を発表する場を設けた。戦争に至る過程でベンヤミンは、プロパガンダとして顕著に表われる言語の道具化を批判しているが、戦後には「経験と貧困」というエッセイのなかで、戦地から帰還した者がみずからの経験を伝える言葉を失ったことも指摘している。Cf. W. Benjamin, »Erfahrung und Armut«, in: *GS* Bd. II, S. 214. 日本語訳は、山口裕之編訳『ベンヤミン メディア・芸術論集』河出書房新社、2021年、167頁。言語の危機に向き合うものとして彼の言語論を解釈する視点について、以下の拙著を参照。『ベンヤミンの言語哲学——翻訳としての言語、想起からの歴史』平凡社、2014年、92頁以下。
- 4) 「言語という領域においてのみ、このような独特の結びつきにおいて見いだされる、受容であると同時に自発性であることを表わすのに、言語は独自の言葉を持っている。

それは、名を持たないものを名のうちに受け容れることにも当てはまる。この言葉とは、事物の言語の人間の言語への翻訳である。翻訳の概念を言語理論の最も深い層に基礎づけることが不可欠である。なぜならこの概念は、従来なされてきたように、何らかの観点から後付けに論じるには、あまりにも広大な射程を有していて強大だからだ」。Idem, »Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen«, S. 150f. 前掲『アンソロジー』、25頁。この点については、以下の論考も参照。細見和之『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む——言葉と語りえぬもの』岩波書店、2009年、62頁以下。

- 5) ベンヤミンは、このような意味での翻訳を雑誌に掲載する際には「原文が添えられる」とし、「こうした点について創刊号は」、「翻訳者の課題」によって「詳細な弁明を行なう」と述べている。W. Benjamin, »Ankündigung der Zeitschrift *Angelus Novus*«, in: *GS* Bd. II, S. 243f. 日本語訳は、「雑誌『新しい天使』の予告」、浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション4——批評の瞬間』筑摩書房、2007年、18頁。
- 6) 「翻訳者の課題」においてベンヤミンは、「翻訳は原作の後から来るものであり、それが成立した時代には一度も選り抜きの翻訳者を見つけれなかった重要な作品においては、その死後の生の段階を印づける」と述べ、この「死後の生」という言葉は文字通りに解されなければならないと主張している。Idem, »Die Aufgabe des Übersetzers«, in: *Werke und Nachlaß: Kritische Gesamtausgabe (WuN)* Bd. 7: *Tableaux Parisiens*, Berlin: Suhrkamp, 2017, S. 13. 日本語訳は、「翻訳者の課題」、前掲『アンソロジー』、89頁。
- 7) 翻訳が「字句通りであること」への要請は、翻訳の「忠実と自由」という規範との関連で語られている。ベンヤミンによると詩的な作品の翻訳は、翻訳者の言語で理解される原作の意味に対してはどこまでも自由であるべきである一方で、原作を構成する一つひとつの字句に対しては忠実である必要があり、そのために翻訳は「字句通りであること」が求められる。このことは同時に、事象を一つひとつ直接に語り出す言葉——それは「言語一般および人間の言語について」のなかで語られていた「名づける言葉」であり、「翻訳者の課題」では「純粹言語」の現われとされる——であろうとする原作の「志向」を「補完する」という。「作品から言語の補完への大いなる憧れが語り出されるところにこそ、字句通りであることによって保証される忠実さの意義がある」。Ibid., S. 21. 前掲訳書、104頁。
- 8) Idem, Brief an Ernst Schoen, Berlin, 25. Februar 1917, in: *Gesammelte Briefe (GB)* Bd. I: 1910–1918, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1995, S. 355.
- 9) 「彼〔ベンヤミン〕は私に、目下ボードレールの翻訳に取り組んでいると語った。実際、彼のかかなり大きな机の上には、まだバリにあったローヴォルト社が1909年から1910年に刊行した『悪の華』のとくに美しい印刷の版があった」。Gershom Scholem, *Walter Benjamin — Die Geschichte einer Freundschaft*, Frankfurt am Main: Suhrkamp,

- 1975, S. 23. 日本語訳は、ゲルシヨム・ショーレム『わが友ベンヤミン』野村修訳、晶文社、1978年、24頁。ショーレムによるヘブライ語聖書の雅歌と哀歌のドイツ語訳は、以下に収録されている。Idem, *Poetica: Schriften zur Literatur, Übersetzungen, Gedichte*, Berlin: Jüdischer Verlag, 2019.
- 10) Idem, »Über Klage und Klagelied«, *ibid.*, S. 35. ベンヤミンは「言語一般および人間の言語について」のなかで、人間の言語が既知の内容を情報として伝達するだけの記号へと硬直するとともに、事物はその言語を響かせることができなくなると論じている。そのことへの悲しみが「嘆き」となってざわめくのだ。彼によると「嘆き」は、「まったく分節されていない、無力な言語の表出であり、そこにはほとんど物象としての吐息しか含まれていない」。W. Benjamin, »Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen«, S. 155. 前掲『アンソロジー』、33頁。
- 11) Idem, Brief an Gershom Scholem, Berlin, 26. März 1921, in: *GB* Bd. II: 1919–1924, 1996, S. 145f.
- 12) Idem, Brief an Gershom Scholem, Zürich, 17. Juli 1917, in: *GB* Bd. I, 370f. なお、この手紙のなかでベンヤミンは、ヘルダーリンによるピンダロスの翻訳と並ぶ偉大な翻訳作品として、シュテファン・ゲオルゲによるダンテの『神曲』の翻訳を挙げている。ヘルダーリンとゲオルゲは「翻訳者の課題」においても、「第一級の詩人」であると同時に偉大な翻訳者でもあったとされている。Idem, »Die Aufgabe des Übersetzers«, S. 18. 前掲『アンソロジー』、99頁。
- 13) *Ibid.*, S. 24.
- 14) Franz Rosenzweig, »Nachwort zu den Hymnen und Gedichten des Jehuda Halevi«, in: *Zweistromland: Kleinere Schriften zur Religion und Philosophie*, Berlin: Philo, 2001, S. 83. 日本語訳は、フランツ・ローゼンツヴァイク『「イエフダ・ハレヴィ」のあとがき』、村岡晋一、田中直美編訳『新しい思考』法政大学出版局、2019年、322頁。イエフダ・ハレヴィの詩のドイツ語訳による選集は、単行本としては1924年に刊行された。「あとがき」はそれに先立って書かれている。
- 15) *Ibid.*, S. 85. 前掲訳書、324頁。こうした翻訳としてローゼンツヴァイクは、当時広く読まれていたウルリヒ・ヴィラモーヴィッツ＝メーレンドルフらによる古典の翻訳を念頭に置いている。
- 16) ローゼンツヴァイクによると、翻訳者が「異質な声を空間や時間の深淵を越えて聴き取られるようにする拡声器」と化すとともに、「異質な言語による言語の更新」が起きる。Loc. cit. 前掲訳書、325頁。
- 17) 魯迅『「硬訳」と『文学の階級性』』増田渉訳、『魯迅選集』第8巻、岩波書店、1956年、140頁。
- 18) 1926年に「国共合作」によって始まった中国大陸の国民革命は、1927年に蒋介石が起こした反共クー・デタを経て、国民党政権による全土の平定へ向かう。それに反撥

した青年知識人は、マルクス主義に活路を求める一方、魯迅ら旧世代の知識人を攻撃し始める。そのような状況を見据えながら、また若い世代の理論の浅薄さを憂いながら、魯迅はマルクス主義の文献の中国語訳を進めた。その「硬訳」は、真に革命的な思考の媒体となる言語の創造へも向けられていた。魯迅の翻訳論とそれを表わした著述の理解について、以下の論考に負うところが多い。丸川哲史『魯迅入門』インスクリプト、2014年、199頁以下。

- 19) W. Benjamin, »Die Aufgabe des Übersetzers«, S. 19. 前掲『アンソロジー』、99頁。
- 20) Ibid., S. 14. 前掲訳書、91頁。この点にベンヤミンの翻訳論の核心を見る解釈を示すものとして、以下の論考を参照。守中高明『脱構築』岩波書店、1999年、50頁以下。
- 21) W. Benjamin, »Die Aufgabe des Übersetzers«, S. 17. 『アンソロジー』、96頁。
- 22) 「これに対して翻訳の言語は、意味に対しては自由にふるまうことができる、いやそうしなければならない。原作の志向を再現として響かせるためではなく、調和として、つまりそのなかに原作の志向が明かされる言語の補完として、翻訳の言語に固有な志向の仕方を響きわたらせるために。〔中略〕むしろ翻訳作品から言語の補完への大いなる憧れが語り始めることこそ、字句通り翻訳することによって保証される忠実の意義である」。Ibid., S. 21. 前掲訳書、103頁以下。
- 23) 「古典古代」と称される時代から続く、支配と被支配の関係を打ち立てる「自民族中心主義的翻訳」の伝統を顧みたくえて、それを乗り越える可能性へ向け、他者の言葉をその異質さにおいて肯定する翻訳の姿を提示する論考として、以下を参照。そこで「異なるもの」をその肉体という意味での身体性において迎え入れようとする」翻訳が語られていることは、ベンヤミンの「翻訳者の課題」の議論の倫理——それはエマニュエル・レヴィナスの「倫理」としての哲学も受け継ぐ倫理だが——への継承を示していよう。アントワヌ・ベルマン『翻訳の倫理学——彼方のものを迎える文字』藤田省一訳、晃洋書房、2014年、89頁以下。
- 24) W. Benjamin, »Die Aufgabe des Übersetzers«, S. 23. 前掲『アンソロジー』、106頁。
- 25) Ibid., S. 21. 前掲訳書、103頁。
- 26) Gayatri Chakravorty Spivak, *A Critique of Postcolonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present*, Cambridge: Harvard University Press, 1999, pp. 162–163. 日本語訳は、ガーヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァック『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために』上村忠男他訳、月曜社、2003年、236頁以下。
- 27) G.C. Spivak, »The Politics of Translation«, in: *Outside in the Teaching Machine*, London: Routledge, 1993, p. 201. 日本語訳は、ガヤトリ・チャクラヴォーティ・スピヴァック『翻訳の政治学』鶴飼哲他訳、『現代思想』青土社、1996年7月号、29頁。
- 28) Ibid., p. 202. 前掲「翻訳の政治学」、30頁。
- 29) 法を指定する際に作用する力と、法的な制度を維持するために作用する力を「神話的

暴力」の概念で捉え、これを人々を支配するために、「神話」とともに振るう国家を暴力の体系として批判するとともに、その歴史の終わりを追究する「暴力批判論」は、「翻訳者の課題」に先立って1920年の初めから春までの時期に書かれた。そのなかでベンヤミンは、死刑の執行においてこそ、法を措定しつつ維持しようという恣意性が、「法の何か腐ったもの」として露呈すると論じている。W. Benjamin, »Zur Kritik der Gewalt«, in: *GS Bd. II*, S. 188. 日本語訳は、「暴力の批判的検討」、前掲『アンソロジー』、54頁。

- 30) これ以外に、ベンヤミンが翻訳を論じる際に、基本的には古典語を含む西洋の主要言語と古代ヘブライ語しか念頭に置いていないのに対し、スピヴァクが第三世界の言語、さらには「言語」の地位が認められてこなかった言語も視野に収めている点、さらには彼女が、言語という制度の浸透によって言葉遣いがジェンダー化され、性差別が強化されるといった問題を見据えている点を、二人の対照点として挙げることでできると考えられる。残念ながら、ここではそれらの点に踏み込むことができない。
- 31) 「言語一般および人間の言語について」のなかでベンヤミンは、神の言葉の創造性を示す「名」を、「そこにおいて言語がそれ自体として、絶対的に伝えられる」媒体と規定したうえで、「名づける者」としての楽園の「人間から純粹言語が語る」と述べている。Idem, »Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen«, S. 143f. 『アンソロジー』、14頁。
- 32) Idem, »Die Aufgabe des Übersetzers«, S. 20. 前掲訳書、101頁。
- 33) G.C. Spivak, »The Politics of Translation«, p. 202. 前掲「翻訳の政治学」、29頁。スピヴァクが英語へ翻訳したデリダの著作とは、『グラマトロジーについて』である。J. Derrida, *Of Grammatology*, translated by G.C. Spivak, Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1976. その訳者序文が日本語へ訳されている。G・C・スピヴァク『デリダ論——『グラマトロジーについて』英訳版序文』田尻芳樹訳、平凡社、2005年。
- 34) デリダによれば、「固有の言語がある」ことは、「政治的で幻想的な構築の非自然的な過程」の効果でしかない。J. Derrida, *Le monolinguisisme de l'autre*, p. 45. J・デリダ『たった一つの、私のものではない言葉』、43頁。
- 35) デリダは『他者の単一言語使用』のなかで、こうして最初に習い覚えた言語を他者に奪われ、「同一性の障害」に陥ったことを告白している。Cf. *Ibid.*, pp. 33–37. 前掲訳書、26頁以下。
- 36) このことをデリダは、自身の境遇と結びつけながら次のように述べている。「したがって、すべての言語を奪われているがゆえに、そして彼にはもはや他の頼みの綱が——アラビア語もベルベル語もヘブライ語も、祖先が話していたであろう言語のなかのいかなるものも——ないがゆえに、すなわちこの単一言語使用者は一種の失語症であるがゆえに（おそらく失語症であるからこそ、彼はものを書くのだろう）、彼は絶対的な翻訳のなかへ、準拠の極がない、起源となる言語、この出発の言語がない翻訳のただ

- なかへ投げ出されている」。Ibid., p. 117. 前掲訳書、116 頁。
- 37) Ibid., p. 129. 前掲訳書、132 頁。
- 38) W. Benjamin, »Die Aufgabe des Übersetzers«, S. 18. 『アンソロジー』、97 頁。
- 39) 例えば、「迫奏」の冒頭の「草、切れ切れに書かれて」という言葉を含む一節に、ツェランがアラン・レネ監督によるドキュメンタリー映画『夜と霧』（1956 年）のジャン・ケロールによるナレーションをドイツ語へ翻訳した経験が影を落としている点について、以下の論考を参照。Marlies Janz, *Vom Engagement absoluter Poesie: Zur Lyrik und Ästhetik Paul Celans*, Königstein: Athenäum, 1984, S. 223. ここでは「野草」のモチーフについて、これもツェランがロシア語からの翻訳を手がけたエフゲニー・エフトゥシェンコの詩「パービ・ヤール」（1961 年）との関連も指摘されている。そのモチーフが現われる箇所を、1962 年に雑誌『意味と形式』で発表されたツェランのドイツ語訳から訳出しておく。「パービ・ヤールの丘の上、ここでは繁みが、草が語る。／かくも厳しく樹木はきみを見つめる。／裁判官の眼で」。Paul Celan *Gesammelte Werke* Bd. 5: *Übertragungen II*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1983, S. 285.
- 40) ソンディはベンヤミンの「翻訳者の課題」を参照しながら、ツェラン独特のドイツ語への翻訳を検討している。Peter Szondi, »Poetry of Constancy – Poetik der Beständigkeit: Celans Übertragung von Shakespeares Sonett 105«, in: *Schriften II: Essay – Satz und Gegensatz / Lektüren und Lektionen / Celan-Studien*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1978, S. 325ff.
- 41) Ibid., S. 335. ベンヤミンの翻訳論の解釈を踏まえつつ、この点を強調した論考として、以下を参照。Shimon Sandbank, *The Wall and the Arcade: Walter Benjamin's Metaphysics of Translation and its Affiliates*, Brighton: Sussex Academic Press, 2019, pp. 35–37.
- 42) 「まだ歌える歌がある。／人間の彼方に」。こう結ばれる「絲の太陽」にアドルノの言葉への応答が含まれる点については、以下の論考を参照。平野嘉彦『土地の名前、どこにもない場所としての——ツェラーンのアウシュヴィッツ、ベルリン、ウクライナ』法政大学出版局、2015 年、41 頁以下。すでに『文字移植』（河出書房新社、1999 年）においてベンヤミンの「翻訳者の課題」への応答を試みていた作家の多和田葉子は最近、ツェランの「絲の太陽」の内実を、彼の詩の数々を参照しつつ、またベンヤミンの思考も念頭に置きながら掘り下げる小説『パウル・ツェランと中国の天使』をドイツ語で（Yoko Tawada, *Paul Celan und der chinesische Engel*, Tübingen: Konkursbuch, 2020）発表している。その日本語訳は、『パウル・ツェランと中国の天使』関口裕昭訳、文藝春秋、2023 年。
- 43) ツェランは、1955 年に刊行された二巻の著作集——そこには「翻訳者の課題」も収録されている——を中心に、ベンヤミンのテキストに早くから取り組んでいた。そのことをツェランの蔵書への書き込みが物語っている点について、以下の論考を参照。

関口裕昭『パウル・ツェランとユダヤの傷——《間テキスト性》研究』慶応義塾大学出版会、2011年、126頁以下。

- 44) W. Benjamin, »Die Aufgabe des Übersetzers«, S. 18. 『アンソロジー』、97頁。
- 45) Ibid., S. 19; idem, *Berliner Kindheit um neunzehnhundert* (»Der Strumpf«), in: *WuN* Bd. 11: *Berliner Chronik / Berliner Kindheit um neunzehnhundert*, Berlin: Suhrkamp, 2019, S. 537f. 日本語訳は、『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』より「靴下」、浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション3——記憶への旅』筑摩書房、1997年、552頁以下。このエッセイのなかでベンヤミンは、抽斗のなかに丸めて並べられた靴下を広げてはくるむ遊びから教えられるのは、文学的表現における内容と形式、被われているものとその被いが分離しがたいことだと語っている。

■付記

本稿は、2023年3月25日に立命館大学末川記念会館で開催されたシンポジウム「〈翻訳者の使命〉はいかに受け継がれたのか——ベンヤミン『翻訳者の使命』と、20世紀フランスを中心とするその受容」における発表原稿に、加筆と修正を施したものである。ベンヤミンの翻訳論とガヤトリ・C・スピヴァクの翻訳論を対照させる議論の一部は、2023年9月27日から30日にかけてポーランドのワルシャワで開催される国際ヴァルター・ベンヤミン協会の研究集会「正義の政治——テキスト、イメージ、そして実践」(International Walter Benjamin Society Conference in Warsaw: “Politics of Justice: Text, Image, and Practice”)での研究発表でも紹介する予定である。

科学研究費補助金基盤研究Bによる研究「20世紀フランスにおけるハイデガーとベンヤミンの受容史の解明」の成果を示すものとして開催されたシンポジウム「〈翻訳者の使命〉はいかに受け継がれたのか」を組織された亀井大輔氏には心より感謝申し上げます。百年前に刊行されたベンヤミンの「翻訳者の使命／課題」の背景にある詩的言語とその翻訳の実践を踏まえつつ、この翻訳論のジャック・デリダ、アントワヌ・ベルマン、ポール・ド・マンらによる受容の意義と、論争を含んだ受容の文脈を論じたこのシンポジウムの議論は、刺激に富むものだった。貴重な研究発表を行なった長澤麻子氏、西山雄二氏、宮崎裕助氏、亀井氏に深く感謝申し上げます。

